

アブラハムの見た幻: Abraham's Vision

これらの事の後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、非常に大きい」。アブラムは言った、「神、主よ、わたしには子がなく、わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださるのですか」。アブラムはまた言った、「あなたはわたしに子を賜わないので、わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでしょう」。この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとを継がなければならない」そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようなになる」。アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。また主は彼に言われた、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継がせようと、あなたをカルデヤのウルから導き出した主である」。彼は言った、「主なる神よ、わたしがこれらを所有することが何によってわかるでしょうか」。すると主は彼に言われた、「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山ばとと、家ばとのひなとをわたしの所に連れてきなさい」。彼はこれらをみな連れてきて、二つに裂き、裂いたものを互に向かい合わせて置いた。ただし、鳥は裂かなかった。猛禽が死体の上に降りるとき、アブラムはこれを追い払った。日が沈みかかったころ、深い眠りがアブラムを襲った。そしてひどい暗黒の恐怖が彼を襲った。そこで、アブラムに仰せがあった「あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国を、わたしがさばく。その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来る。あなた自身は、平安のうちに、先祖のもとに行く。あなたは長寿を全うして葬られる。そして、四代目の者たちが、ここに帰って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである」。さて、日は沈み、暗闇になったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで」。

コメント: アブラハムは主を信じた、の「信じた」は使役動詞が使われています。どういうことでしょうか。この個所では、結果的にアブラハムが信じたのですが、信じるに至った経緯は神が働かれたことです。神が信じさせたことですが、信じるようにアブラハムの心に働かれたと考える方が良いのかもしれない。神は憐れみ豊かな方で、現在、過去、未来をも支配しておられ、人に自由をも与えておられます。もし、人が間違った判断をした場合、修正の道を準備しておられます。現に、アブラハムはこの後に失敗しますが、神はそのことを咎めません。この世で、失敗しない人は一人もないと思います。その過ちに気づくか気づかないか、認めるか認めないかは人の心にかかっています。間違っているのか、間違っていないのかの基準は、神のみこころにあります。それを知らせようと、神は聖書を通して、私たちに教えようとしています。

神はアブラハムと契約を結んだと言われます。その内容は、三歳の雌牛、三歳の雌やぎ、三歳の雄羊、山ばとと家ばと、それらを真二つに裂いて、その間を通る方法です。もし契約を破ったら、裂かれた動物のように、裂き殺されるというものです。しかし、その間を通ったのは、煙の立つかまどと燃えているたいまつです。これは神ご自身を示します。アブラハムは深い眠りに陥っていて通ることはできません。この契約を破った時に殺されるのは、アブラハムではありません。その責を神が負ってください。神が犠牲を払われます。

「わたしはあなたの子孫に、この地を与える」。この与えるは未来に起こる出来事ですが、この文節では、完了形が使われています。もうすでに与えられていることを示します。与えるのは神で、与えられるのは、アブラハムの子孫です。四代目とは誰のことを言うのでしょうか。「自分たちのものでない地で寄留者となり、彼らは奴隷とされ・・・」。聖書を読み進めていくと、その場所はエジプトであることがわかります。四百年間、エジプトで奴隷にされて生活します。そこから解放されて帰ってきます。その記事が出エジプト記に記されています。